

# たばこへの依存度と 喫煙量の価格弾力性の関係についての分析\*

上村 一樹<sup>†</sup>  
東洋大学 経済学部 助教

## Abstract

本稿では、日本家計パネル調査 (JHPS) を用いて、たばこへの依存度の高さと喫煙量の価格弾力性の関係について分析を行った。具体的には、ニコチン (タール) の摂取量の多さをたばこへの依存度の高さの代理変数として、Quantile Regression を用いた分析を行った。Quantile Regression を用いることには、特定の閾値により依存度のグループ分けをする必要がない、という利点がある。

その結果、たばこへの依存度が高いほど、喫煙量の価格弾力性は低いことが明らかになった。弾力性が最も大きかった 30%点と、最も小さかった 70%点から 90%点の違いを比べると、両者の違いはおよそ 2 倍程度となった。統計的に有意なものだけを見ると、最も小さい場合で絶対値が 0.4、最も大きい場合で絶対値が 1.1 程度であった。また、間接的な形ではあるが、その関係には男女差も見られた。

上記の結果より、たばこによって最も健康を害していると考えられる者、すなわち、ニコチン (あるいはタール) の摂取量が多い喫煙者の弾力性が小さいことになる。たばこへの依存度が高い場合、禁煙の価格弾力性も低いことが先行研究により知られているため、増税を繰り返すほど、禁煙への影響、喫煙量への影響の両面から、その効果は小さくなることが予想される。健康増進を目的としてたばこ税を増税する際には、その点を考慮しておくことが望ましい。

---

\*本稿で用いている日本家計パネル調査にニコチンやタールの摂取量の質問が含まれることとなったのは、河井啓希先生 (慶應義塾大学 経済学部 教授), 野田頭彦先生 (和歌山大学 経済学部 講師) のご尽力も大きい。この場を借りて感謝申し上げる次第である。

<sup>†</sup> (E-mail:kamimura107@toyo.jp).